

魯庵

坪内祐三『編集』 edited by Yūzou Tsunouchi

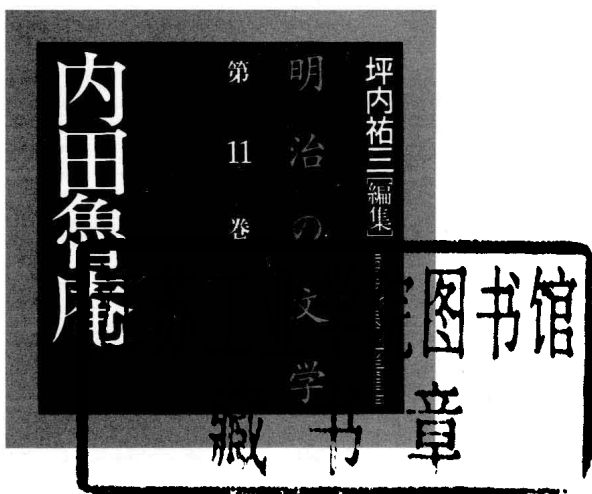
明治の文学

第 11 卷

内田魯庵

筑摩書房

R o a n U c h i d a



筑摩書房

明治の文学

第11巻 内田魯庵

二〇〇一年三月二十日 初版第一刷発行

編者 坪内祐三 鹿島 茂

発行者 菊池明郎

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五二三 〒一一一八七五五
振替〇〇一六〇一八四二三三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社積信堂

ISBN 4-480-10151-9 C0393 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

※注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三二一八五〇七 大宮市櫛引町二一六〇四
筑摩書房サービスセンター

電話〇四八六五一〇〇五三

文・学・者・な・る・哉、文・学・者・な・る・哉。天変地異を笑つて済ますものは文学者なり。

社会人事を茶にして仕舞ふ者は文学者なり。否、神の特別な蟲負を受け
て自然に *hypnotize* するものは文学者なり。文学者なる哉、文学者なる哉。

目次

くれの廿八日……………	3
文学者となる法……………	109
楼上雑話(抄)……………	255
二葉亭四迷の一生……………	319
予が文学者となりし径路……………	407

萬年筆の過去、現在及び未來……………424

ステツキのカタログの序……………438

解説—心ならずも操觚者に—鹿島茂……………442

明治文学年表—坪内祐三……………451

内田魯庵年譜……………455

同時代人の回想—内田魯庵先生に関する追憶—木村毅……………461

明治の文学

第11巻

内田魯庵

全巻編集

坪内祐三

本巻編集・解説

鹿島 茂

脚注

花崎真也・川岸絢子

脚注図版

林丈二・林節子

編集担当

松田哲夫（筑摩書房）

ブックデザイン

吉田篤弘・吉田浩美

くれの廿八日

其 一

歳暮の二十八日だといふに、

こゝらに隠れもない揚土門の金満家では来陽の準備が猶だ出来ずにゐる。煤掃も障子の張替も畳の表換も庭の掃除も盆栽の手入も何一つ出来ぬさうだし、旦那様は苦い顔をして奥様はツンケンしてござる、奉公人は仏頂面する、飼犬は噛付く様に吠える、出入の商人は窃々と来て窃々と帰る、偶さかの来客も冷へた茶一杯で追返され、座敷も庖厨も寂寞閑として八十何坪のだゞ広い家が恰で火の消えた様である。

元来華奢好きの奥様天下で、年末は格別に人出入繁く、奉公人を初め出入の袴纏着、牛乳配達、新聞配達の末まで歳暮の気前を見せ、世間は越すの越されぬのと遣縁に忙がしい中で、此家はかりは追羽子の春めいた音を牆越に往來の人に聞かしたのが、之はまたも厭したものか、例も二十五日払ひが定例の勘定すら押迫つて猶だ下らない始末で、出入の者が例に由て塩鮭や砂糖袋を持込んでヒョコ／＼頭を下げて揉手にしても、奉公人の脹れた面に算勘を狂はして悄然と帰る。何でも尋常事ではないと、寄ると触ると此話題で持切つてゐたが——中働きが迂濶り口走つたを漏聞

(1) 平安時代、屋根を平にして上に土をのせた門。後世は形だけのこり、土の代わりに檜皮(ひわだ)などを用いる。
(2) 大工、植木屋などの職人、自家の職業の印を入れた半纏を着ていた。



図 1

(3) 明治一四年に麴町の北辰社がブリキの大きな缶に入れて牛乳の配達を始めた。明治三三年にガラス器に移行し始める。



図 2

くと、夫れも其筈で、

やがて一ト月前に奥様が泣声を慄はして旦那様と大論判をしたさうだ。それから媒妁人が朝に晩に出入をする、本家から煩さく手紙が来る、旦那様は二階の書斎に閉籠つた切で脊戸の鶏舎でくく、と餌を求める秘蔵のハンバグをも飼殺しの久助爺さんに任してしまひ、奥様は離れのお部屋を閉切つて自慢の栄左衛門の音締をベんともさせないで一切の家事を仲働きの銀が詮事なしに取仕切つてゐるまゝに打棄つて置いた。でもなく他人同士が下宿してゐる様なもので、顔を見合はしても緘黙と口を交かずにゐた。

此二三日、奥様のお吉は病氣だと云つて離室の蓐に就き、甲走つた声が例もよりは激しく奉公人の肝を冷さした。旦那様の純之助は朝から出掛けて深更けて帰ると、苦い顔をして、深い溜息を吐いて書卓の前に根が生へた様に固くシヤチコバツて一二時間考へ草臥れて蓐に入つてからも反側ばかりしてゐた。

昨日は午後から媒妁人の高橋善兵衛、湯島で梶善と少しは人に知られた袋物屋の主人が来て、半日密々と二階で純之助と相談した後、一緒に何処へか出掛けて、其晩深更けてから純之助だけが一人で帰つて来た。平生も酒を飲まない人が不思議に赤い顔をして、不思議な足拍子で階子を躍上つて、不思議な唄を不思議な節で唄つて、挙句に草臥れてグツタリと蓐に倒れた時は欠伸交りに不思議な溜息を洩した。斯ういふ容子を見たのは奉公人も初めてださうで。

(4) 羽根つき遊び。



図 3

(5) 垣根越し。

(6) 集金のあてがはずれて。

(7) 奥女中や下女に對して、

奥向きと勝手向きの間の雑用をする女中。

(8) 言い争ひ。

(9) 裏庭。

(10) ドイツ原産で、イギリスで改良された鶏。姿が小さく

優美で、觀賞用にも飼われた。

(11) 雇い人などを、役に立た

なくなつても死ぬまで養うこ

と。

(12) 三味線の弦を巻き締めて、

調子を整えること。

(13) 紙入れ、がま口、煙草入

れ、手提げ袋など袋物を商う

店。

其翌る日が即ち二十八日で――

二番鶏が啼くと間もなく、薄暗い中から雨戸を勢ひよくガラ／＼開け、珍らしく最愛のブルドッグを伴れて朝寒を侵して散歩に出掛け、帰ると又珍らしくハンバークに自身と餌を与つて珍らしく茶の間で朝食を済まし、珍らしく小間使の浜を擲擧つて高声に笑ひ、珍らしく庖厨へ来て久助爺さんに無益口を叩き、珍らしく中働きの銀に二階の掃除を命令け、珍らしく庭下駄を引摺つて離室の椽からツイ四五尺を離れた鍾乳石の傍でブルドッグを擲擧ひながら乾蒸餅を与つた。

で、窺と障子の硝子越しに離室を覗くと、お吉は良人の冴えた声が珍らしく庭先で聞えるを知らぬ振して後向きのまゝ咳きさへもしなかつた。が、真実睡てゐるとは請取れぬ容子で、此容子を見た純之助は暫らく躊躇つたが公麿やら面白からぬ顔して再び平日の様に二階の書斎に引込んで了つた。

『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍、』と高らかに古詩を吟じて後ろさまに投出す様に黒熊の皮を敷いた簾の寝台椅子に倒れ、眩しさうな眼を半分閉ぎ小鼻に皺を寄せて何処となく睨んだ。

純之助は三十二三で、中脊の肥満した、眼付の鋭い口元の緊つた、肩幅の広い、何方かといふと厳格い方で、揉上から願へ掛けて疎らな髻の生へたのが一層男振をひくせあり氣に見せた。

莫大の襦衣を二三枚着た上にフラスルの単衣と黒ッばい銘仙の綿入とを重ね薩

(1) 鍾乳洞から採掘した石灰岩の庭石。

(2) 障子の一部分に硝子がはめ込んであるもの。



図4

(3) 籠の鳥のように不自由で、浮草のようにたよりない。

(4) 紡糸糸で織つた軽い織物。

(5) 平織の絹織物。

(6) 沖繩産の木綿の細い紺。薩摩を経て販売した。

(7) 「小糠三合あるならば入り婿すな」。

(8) ためいきをつくさま。

(9) 法隆寺に見られるササン朝ペルシャ風の唐草の模様。

(10) 手織厚地の高級敷物。

(11) 一六三九―九五。中国明の僧。長崎興福寺に入る。

摩の蚊絆の綿入羽織を引掛け、鼠色に化けた白縮緬の帯を縄の様にしごいて締めたようす。風采は、何処やらに品格があつても一級所得税を納める区内の金満家らしくは見えないで、

『小糠三合——往時からの相場だ、』と口裡で呟いて喟然として歎息した。

聽て椅子を離れて、十畳から次の六畳へと殆んど機械的に直角を作つて運動し初めた。恰度疲労した兵士が士官の号令に余義なく進行する様に姿勢も歩武も力が抜けてゐた。

二階は二室だけで、二室とも書斎らしく奇麗に整理つて、法隆寺摸様の段通を一杯に敷詰め、心越禪師の扁額を楣間に掲げ、抱一上人が源氏絵扇面散らしの金屏風を片隅に建て、顔輝が錦欄表装の大幅、唐物古銅の獅子の香炉、柿右衛門が錦染の花瓶、寛斎が蒔絵の手匣など、先代が好事家だけに何れも由緒ある有川家自慢の逸品を床、達棚に飾立てた中に、表紙の手摺れた洋書、報告書めいた仮綴物、四五本残つた葉巻の箱、封口を開けた葡萄酒の瓶、古新聞で包んだ農産物、薦縄揚げの標本を塵埃と一緒に埒もなく散逸し。折角好事家が忝けなさに涙覆して勿躰ながら名物を可惜見栄もなくがらくたの中に埋めてゐた。

で、風雅でもない男が、昨夜酒氣に乗じて江戸川半切の継いだのに、「和順斎をどうのやるのじやにしたらあはへなまらものと」
「家之本、循理保家之本」と拙劣に我流の毫を墨黒々と揮つて其下に告朔餼羊坊と落款したのを、和洋の書籍をギッシリ詰込んだ大形の西洋書架の上に張付けた

(12) 長押（なげし）にかける横長の額。

(13) 酒井抱一（二七六一—一八二八）。出家の後、光琳に傾倒して独自の画風を開いた。

(14) 中国元代の宮廷画家。

(15) 金欄の表装をほどこした画仙紙一杯の幅の軸。

(16) 中国、朝鮮から渡來した古い銅製の獅子型香炉。

(17) 有田の代々の陶工酒井田柿右衛門による、赤を中心にした色彩豪華な染付の花瓶。

(18) 江戸後期の蒔絵師古満寛哉か。父子二代ある。

(19) 趣味人。

(20) 江戸川付近でつくられた手漉きの書簡用巻紙。

(21) 「告朔餼羊」は告朔の礼に供える犠牲の羊の意で、転じて虚礼、無用の意に用いる。



図5

のが部屋の中で何よりも一番目に着いた。

一 巡隅から隅を運動して壁上に掛けた墨西哥及び中部亜米利加の図の前まで来ると、轟然と佇立まつて苦い顔が次第に和いで来たまで見蕩れてゐた。

『南太平洋鉄道を下つて……』と指頭で地図を搜つて独語ちた。『国境エルパソを通過ぎてチワワ……』

チワワ——渺茫たる原野に僅々数年の間に五萬の小都を作り出した、殆んど盛氣楼を欺く奇蹟で、州知事のアウマダと革命の元勳テラザスとは永く歴史に伝はるべき名だ。爰にはまた墨西哥の華盛頓と云はるゝエズイト宗のイダルゴ上人が血を流した遺蹟が今でも行人の征衣を湿はす哀れを留めてゐるのだ。此チワワを南下する更に三四百哩、ザカテカス市は西半球の最大著名の地で、コロンブスの大陸発見後、爰で初めて銀山が発見せられ、恰度今のクロンダイクの騒動の様に投機熱が遽に勃興して、北米大陸で初めての百萬兩富限が一夜の中に首を持上げ、北米大陸で初めての新銀貨が燦々光り出したのだ。今から三百五十年前で、此発見隊の一番傑い奴がクリストバル、デ、オニヤーテといふ大胆不敵の冒険者だ。此奴の小倅が其上手を行く無敵な豪傑で、コルテズ將軍の孫女を女房にして同気相求むる剛腸石心の鉄脚隊を組成つて予ブラスカからカリフォルニア湾まで探検した奴だ。今の合衆国の西南三分一は即ち此オニヤーテ父子が勁勇無双の鉄腕で創建したので……

『クリストバル、デ、オニヤーテ——豪傑だナア、』と思はず力瘤を入れて慷慨

(1) メキシコ国境近くを横断するアメリカの鉄道。

(2) メキシコ国境に面したアメリカ・テキサス州の都市。

(3) メキシコ中央高原にある。

(4) 広くはてしないさま。

(5) 一八九二―三年チワワ州監督官。

(6) チワワの大農園主となり、一九一四年チワワ州知事。

(7) イエズス会。

(8) 一八一〇年九月一六日、武装蜂起の先頭に立ち、メキシコ独立運動の端緒を開いた。

(9) 旅人の衣服。

(10) 一五四六年銀鉱の発見によつてできた都市。

(11) カナダのクロンダイク川流域で砂金が発見され、ゴールドラッシュを招いていた。

(12) メキシコ征服者の一人。

(13) 探検家。一五八九年、ニューメキシコ総督となる。サンフランシスコの創設者。

(16) した。『野猪の勇、野猪の勇……かも知れぬが豪傑だ。黄金に渴する奴、酒肉に飽く奴、美人に溺るゝ奴……』

……如斯な下劣の匹夫に何が出来る？ オニヤーテが九牛一毛ほどの仕事も恐らく難かしからう。獵官だの、売収だの、政綱だの、マニフェストだの外資輸入だの増税だの軍備緊肅だのと騒立てるが、トゞの結局は弗箱一杯の金子を貯めて色の全白い奴を四五人も飼殺しにしたいばかりの国利民福論で自分等が酒が飲みたさに祭礼騒をする町内の若者と何辺に相違がある。策士と金看板打つた大政事家が何をした？ 高価で政党を売附けて機密費に煖たまる駈引が精一杯で真向に殖産興業を振翳して国益の急先鋒と称する大実業家が何をした？ 不相応な配当に株の相場を狂はして手拭紙にもならぬ株券を売飛ばす魂胆が満身の智慧袋だ。惣じて一国を挙げ利奔名走に勞らされ、蝶鳥の花に酔ふて夕風の葉越に來るを知らぬ間に濠洲は独立の歩を進め、南米諸国は次第に文明を競ひ、墨國太平洋鉄道は瓦地馬拉國境まで聯絡し、尼加拉瓦運河は疏通し、巴拿馬の開鑿は竣功し、太平洋と大西洋は俄に近接し、キャリビアン海が海上鈞勢の中心となり、中部亜メリカが東印度の繁昌を來し、布哇群島が東西二球の樞軸となり、太平洋が世界の檣舞台となるのだ。十八世紀に勃興した南欧の遠征熱革命の聲に銷沈して歐羅巴が内争に悩まざるゝ事凡そ百年、人種の膨脹と社会の逼迫とで必要上再燃した殖民の競争が漸く激烈となるは既に數年に差迫つた二十世紀で、我々が未來の太平洋問題に処して平和の鑰を把

(14) スペインの征服者。一五二二年メキシコ初代總督。

(15) 強い心と堅い意志。

(16) 奮い立つ心をもらした。

(17) 向こう見ずな勇氣。

(18) いやしい男。

(19) ごくわずかな。

(20) あらそつて官職を得ようとするこゝと。

(21) 政策の根本方針。

(22) 宣言。

(23) 白く化粧した妾（めかけ）を數人も囲いたい。

(24) 機密費と稱して自分のふところに入れる。

(25) 産業を振興し、開發する。

(26) イギリス人によつて計画されたが、一九〇二年の火山爆發により完成しなかつた。

(27) スペイン、ポルトガル、フランスなどからの移住。

持する盟主となるには北緯三十度以南の太平洋一帯の地に雄鎮を築くが第一の準備である。我々はヒューマニチイを宣伝し、能ふべくんば世界の軍備を撤回するを庶幾するが故に歴史上必然避くべからざる人種の衝突を救はんが為め縱令卵殻を以て巖石を砕くより難くとも此風雲に際会して平和の福音を伝へんとするので、恰もノアが天の未だ霖雨せざるに先だち明命を畏みて方舟を建造したと全じ心持で、此獸慾的競争の高調に乗じて無人の楽郷に新ユトーピアを創開かんとするのである。即ち此無人の楽郷は……

『墨西哥……墨西哥』と猛然として腕を叩いて慷慨した。

サンチアゴの沿岸に牛馬を放つも面白し、チワワの深山窮谷を探つて鉄椎を奮ふも面白し、アルメリヤの北岸に日本式の稻田を拓くも面白し、シナロアの森林に堅材を伐出すも面白し、ソコヌスコの耕区に珈琲園を開くも面白し——と歴々地図を案じて余念もなく其処此処と辿て行く中、端なくも三百年前支倉六郎左衛門が上陸したアカプルコに指頭が留つた。

『アカプルコ——我々の耳には郷里の様に響く、』と口裡で云つて莞爾と微笑した。で又、憶出した様に、『墨西哥……墨西哥』と連呼して満身に力を籠め、肩を怒らし、脇を張つて、唯つた五尺三寸の男が仁王の揺ぎ出す如き身振で大跨に二タ足三足歩き出した。

が忽ち又、力の抜けた様に満身の筋肉が緩み、燦ついた眼が光彩を喪くして跽々

(1) 輪(かぎ)をにぎる。

(2) 抑えのきく強大な都市。

(3) 願う。

(4) 長雨。

(5) ナヤリト州にあり、太平洋に注ぐサンチアゴ川。

(6) コリマ州の都市。

(7) カリフォルニア湾に面する州。

(8) 榎本武揚はメキシコ移民を計画したが、失敗に終る。

(9) 次々とつらなるさま。

(10) たまたま。

(11) 支倉常長。伊達正宗に遣欧使節として派遣された。

(12) につこりと。

(13) 西洋風に束ねた髪型。

(14) おてんば。

(15) 織り目が斜めになった綾織の和服用のコート。

(16) 可良糸。山梨地方で産するよりの強い絹糸の織物。

(17) 中国産の縮緬。粗悪品のため長襦袢に用いられた。

(18) 黒斜子は黒無地の斜子(魚子)織。織り目が粒だつ

と以前の藤椅子に倒れ、暫らく眼を閉ぢて沈吟してゐた。聽て、いゝと舌鼓して無理やりに突起ち、力の無い声で前と同じ古句を口吟さんだ。『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍……』

処へ襖がすウツと開き、中働きの銀が敷居越に手を突いて『お客様』と案内した。同時に顔を出したは、二十一二の高尚な束髮姿で、微塵も白粉気なく凜乎とした風采は少と俅らしいが、色白のぼつとりした豊下の愛嬌ある容貌で、

『珍らしいッ、』と純之助の淋しい顔は俄に春めいて来た。

『ツイ忙がしいので、』と嫣然笑ひながら黒の斜綾の吾妻コートを脱いだ。『クリスマスを済まして漸と楽になつたの。』

質朴な唐糸の上着に小紋を捺いた支那縮緬を重ね、黒斜子の被布を着た野暮くたい服装で、チヨイと衣紋を直しながら銀が薦めた紙布織の座蒲団に遠慮もなく座つて、光琳が描画をした桐胴の火鉢に摺寄つて宝石入と槌目の指環を穿めた真白き手を惜気もなく火に翳した。

『寒いネエ、』と火鉢を央に相對ひに座つた純之助を見上げて、『寒いの子エ……雪が降りさうだワ。』

『忙がしかつたの、』と純之助は懷手をして貧乏揺りをしつゝ、『二ヶ月ばかり見えんかつた子。』

『忙がしかつたの何のツて、』と火鉢に翳した手を揉みながら、『学期の試験をした

たもの。被布は着物の上に着る。



図 6

(19) 横糸に細くよつた紙糸を用いた織物。

(20) 尾形光琳(一六五八—七一六)。江戸中期の画家、工芸家。

(21) 桐の大木を輪切りにし、中をぬいて火鉢の側とした。



図 7

(22) 金属を小槌でたたき、樅目を連続して見せたもの。